

タイトル：2020 年度研究セミナー（第 21 回）

日時：2020 年 12 月 19 日（土）～20 日（日）

オンライン開催

「私の博士論文」

篠田 知暁（AA 研）

本報告では、2014 年度京都大学に提出した博士論文「ワッターズ朝期マグリブ・アクサーにおける国家と地域権力」の執筆過程を、2006 年の博士後期課程編入学前後から学位認定まで段階的にまとめた。そのうえで、論文の執筆期間を長期化させ、また内容を散漫にさせた原因として、論文全体を貫く問題設定について十分考えることなく研究を進めていたことを挙げた。

最初に、論文のタイトルに用いた言葉に説明を加える形で、博士論文の問いとその結論の概略を述べた。その要点をまとめるならば、16 世紀前半現在のモロッコに当たる地域での政治体制の変化はどのように起きたのかという問いに対して、15 世紀初頭から続いていたポルトガル人による沿岸地域での征服活動に対する、既存の王朝国家のジハードを根拠に地域的な権力を動員しようという政策の、多分に偶発的な破綻の結果として起きたと理解すべきであるということになる。そのうえで、単著論文や口頭報告といった形で発表されていった個別の研究の積み重ねから、次第に博士論文として成立しうる問いが現れ、その問いに答える形でさらに議論を膨らませていったことを、具体的な事例を添えて説明した。ただしこれは、私の場合運よく締め切りに間に合わせられたということであって、全体としては迷走していた期間が多く反省すべきであることは、最後に改めて断っておいた。

また、博士論文の準備と執筆の説明に挟む形で、留学期間の体験や、比較的専門が近い研究者とのネットワークづくりについても話した。報告者は 2010 年から 2 年間モロッコに留学することができた。これは手稿本の読解や現地の言葉の理解の助けになっただけでなく、それまで孤立して研究していたのが、専門分野に関する議論について相談できる友人を得る機会ともなった。実際、上記の問いは一人で文献と向き合いながらうんうん言っているよりも、研究会の場を作り、考えていることを言語化してみても友人たちに聞いてもらう中で明確化していったのである。

報告全体については、おおよそ 10 年ほどに亘る執筆期間の様々な局面に関するエピソードを集めた分、いささか冗長になってしまったかもしれない。また、思うようにいかないことばかりだった博士時代について人前で話すのは気恥ずかしくはあったが、参加者の院生の方たちの反応を見るに、博論の準備や執筆について同じような悩みを抱えている人は多いのではないかと。彼らがあまりそのような悩みを抱え込んだり落ち込んだりせず、ほどほど前向きに論文に取り組めるきっかけになれば幸いである。